

# 柘植尚則『プレップ倫理学』

弘文堂、二〇一〇年

小城拓理

## 一 哲学・倫理学教育の現在

近年、研究者の間で哲学・倫理学教育やその教授法への関心が高まっている。このことは様々な学会においてこれに関するシンポジウムやワークショップが頻繁に開催されていることから見てとれる。ごく最近に限ってみても、関西倫理学会を始め、日本哲学会や日本倫理学会などにおいていくつもの企画が立てられている。

しかし、このような場で論じられる教育は研究者を養成するための専門教育ではないことに注意されたい。ここで語られる教育とは主に哲学・倫理学を専門としない学生を対象としたものなのである。私見では、このような関心の高まりの背景には哲学・倫理学教育の将来への危機感がある。つまり、いわゆる全入時代を迎えつつある大学で求められる授業の質の確保、昨

今の事業仕分けに象徴される合理化・効率化の波、そして学生の学力低下といった問題が、事の善し悪しは別として、研究者の危機感を掻き立てているのではないだろうか。大学の教員採用において近年順に増えてきた模擬授業の実施などはその証左であろう。また、サンデルの講義が話題になったことも記憶に新しい。

このような哲学・倫理学教育への関心の高まりを踏まえるならば、本書の出版はまことに時宜を得たものではないだろうか。評者自身、駆け出しの教師としてではあるが、哲学・倫理学教育の一翼を担う者として歓迎したい。特に、本書はその読者に高校生をも想定しているため、初学者の理解を促進するべく様々な工夫が凝らされており、哲学・倫理学を専門としない学生を対象とした授業を行う教師にも裨益すること大である。本稿では本書の概略と特徴を描きつつ、評者のコメントを述べていきたい。

## 二 本書の概略

さて、本書は「はじめに」と「おわりに」を除けば全部で十二章から成っている。全体のイントロダクションの役割を果たす第一章以降は、本書は四つの部分から構成されている。すなわち、第二章から第四章までは規範倫理学、第五章と第六章は主にメタ倫理学、第七章から第九章までは広義の倫理学であるところの社会哲学、他者論、正義論にそれぞれ対応している。そして、第十章以降は応用倫理学である。後述するように本書の内容は極めて豊富であるので、本稿では紙幅の都合上、第一章以降は上記の四つの領域ごとに本書の要点をまとめていくこととする。

「はじめに」と第一章では著者の考える倫理学が提示される。倫理学とは「善い／悪い」、「正しい／正しくない」の基準や意味について考える学問であり、その最終的な目標は人間の生き方や社会のあり方を考えることである。ここで、このような倫理学を学ぶことは役に立たないのではないかと疑義が呈されるかも知れない。これに対し著者は倫理学が他の学問に比べて役に立たないことを率直に認めつつも、倫理学を学ぶことで人間の生き方や社会のあり方について考えを深め、それを自分の人生に活かすことはできると力強く断言する。

### 1 規範倫理学

では、いよいよ本論に入っていこう。第二章から第四章まではそれぞれ「幸福」、「義務」、「徳」と題されている。なぜこの三つなのかという点、この三つこそが人間がよく生きる上で大切なものであり、道徳の原理と考えられるからである。そして、このうちどれを道徳の原理とするかによって、倫理学は幸福主義、義務論、徳倫理学に分けられる。そして、第二章では「現代の倫理学において、最も有力な立場」(二八頁)とされているベンサムとミルの幸福主義、すなわち功利主義が、続く第三章ではカント倫理学が、第四章ではアリストテレスの徳倫理学が平明に解説されている。

### 2 メタ倫理学

第五章「道徳判断」と第六章「道徳」では主にメタ倫理学が中心である。まず、認知主義と非認知主義の対立を軸にメタ倫理学の論争の経緯が整理されている。登場するのは、ムア、エア、ステイヴンソン、マッキー、ヘア、ブラックバーンである。そして次に道徳の理由の問題が瞥見される。また、メタ倫理学とは異なるものの、道徳そのものへの批判として、道徳の系譜学を遂行したニーチェ、道徳のイデオロギー性を暴露したマルクス、近代以降の道徳を特異なものともみなすウィリアムズが簡潔にまとめられている。

## 3 広義の倫理学

第七章「自己と他者」ではまず啓蒙主義における「近代的な自己」(九七頁)の成立と、近代社会において失われた人間の主体性の回復を求めるハイデガーとサルトルの実存主義が概観される。次に、そういった近代的な自己のあり方そのものを批判するフロイトの精神分析学やレヴィンストロスとフリーコーの構造主義、さらにレヴィナスとデリダの他者論などが展開されている。第八章「個人と社会」ではホップズ、ロック、ルソンの社会契約説から説き始め、それにヒュームの契約説批判とスミスの市民社会論が続く。そして、ヘーゲルの市民社会批判とマルクスの社会主義、さらには近代社会批判としてウェーバー、アーレント、フランクフルト学派などが紹介される。第九章「正義、自由、平等」ではロールズのリベラリズムと、それへの批判として登場したりバタリアニズムとコミュニタリアニズムがまとめられている。

## 4 応用倫理学

本書の最後を飾るのは応用倫理学である。応用倫理学は規範倫理学の単なる応用ではないことに注意しなければならない。というのも、応用倫理学は理論を手がかりとしつつも、現実の問題を考察する中で、理論を批判するものだからである。このような応用倫理学には様々な領域があるが本書ではそのうち三つが取り上げられる。第十章から第十二章まではそれぞれ「医

療」、「環境」、「ビジネス」と題されている。それぞれ、医療倫理学、環境倫理学、ビジネス・エシックスが、その歴史と扱う諸問題について明らかにされている。

## 三 本書の特徴と評者のコメント

以上が本書の概略であるが、ここからは評者の思う本書の特徴を形式面と内容面双方から析出しつつ、コメントを記していきたい。形式面の特徴であるが、前述のように本書の最大の特徴は、その読者に高校生をも想定していることだと思われる(IV頁)。そして、著者は本書を高校生でも理解できるように様々な工夫を凝らしている。まずここで特筆すべきなのは、本書には原典への言及ないしそこから引用が一箇所も無いことである。原典の生硬な訳文に頼ることなく、著者自身の理解をもとに、著者自身の言葉でもって古今の思想家の主張を懇切丁寧に説明する努力がなされているのだ。しかも、難しい専門用語は極力排し、たとえそれを使わざるを得ない場合でも、できるかぎり噛み砕いて解説されている。それは「義務」という日常用語と言っても差し支えないものに至るまで徹底されている(三四頁)。また、著者は全体を通じて口語調で執筆することで、倫理学の敷居を下げることに腐心している。さらに、本書は註を一切設けないことで読者の思考を中断させることなく、最後まで一息に読み通せるような配慮もなされている。そして、最

後まで読んだ読者を巻末で待っているのは、充実した索引と詳細な読書案内である。特にこの読書案内は必見である。これは古典の紹介に終始していない。読者のさらなる学習を促すために、読まれるべき他の入門書が一冊ごとに著者のコメントを付して紹介されているのだ。意欲的な読者はこの詳細な読書案内を導きの糸に、より深く倫理学の世界に足を踏み入れることができるだろう。

次に内容面に目を転じよう。まず瞠目すべきなのは、その内容の圧倒的な豊富さである。著者がイギリス道徳哲学研究の泰斗であることは今さら言うまでも無いだろう。だが、それに留まらず本書で取り上げられる面々は、古今その洋の東西を問わず実に幅広い。孟子や荀子までもが組上に載せられているのはさすがに驚いた(四頁)。実は、先に列挙した思想家はほんの一部でしかない。巻末の人名索引に収録されているのはなんと総勢八一名にも上る。しかも、それで全てが尽くされたわけではないのだ。本書が巻末の読書案内と索引を除けば二百頁に満たないことを考えれば、これは驚嘆すべきことではないだろうか。

さらに、このような膨大な内容を手際よく整理する著者の手腕も見事である。先述のように、著者はまず冒頭で倫理学の最終目標を人間の生き方と社会のあり方の探求と規定する。そして、著者はここに軸足を据え、これを本文中で度々確認しつつ(八六―八七、一九三頁)、全ての倫理学説をこの観点から配置

している。また、早いうちに規範倫理学の内実を思い切って功利主義、義務論、徳倫理学に絞って提示することで、本書は全体の見通しが極めてクリアなものとなっている。特にこのことは第九章の構成から看取される。勘のいい読者であれば、たとえ高校生でもこのトリオがここで再演されていることにきつと気づくだろう。そして、読者は再び本書の内容を反芻することが出来るのだ。本書はこのような工夫によって高校生にも無理なく理解してもらうことに成功していると思われる。

しかし、無い物ねだりを承知の上で、気になることを最後に一つだけ申し述べておきたい。再読を重ねた上で評者は、「もっと冒険をしてもよかったのではないか」という思いを禁じ得ない。こう思う理由は二つある。第一に、その学問的誠実性の故か、著者が公平な姿勢を一貫して堅持していることである。

例えば、著者は功利主義を現代倫理学における最有力な立場と認めつつも、功利計算などの問題点の指摘に吝かではない(二九―三二、一三一―一三三頁)。また、カントは厳格に過ぎるのではないかという読者のありがちな批判を予想し、著者はカントの考える道徳というものが極めて限定的なものではないことを説くことで、擁護を図っている(三五頁)。だが、一見、入門書としては長所と思われるこの点は諸刃の剣である。というのも、著者は自身の見解や評価を表明することに余りにも禁欲的であるため、結局、著者自身の立ち位置が見えにくく、読者は読みながら茶々を入れることができないからだ。杞憂であ

ればよいのだが、このような姿勢は鋭い問題意識を持った読者の興趣を削いでしまいかねないのではないだろうか。著者自身が自らをさらけ出し、著者と読者の仮想の対話を産むことは、読者の倫理学への関心を育むことに繋がるはずだ。公平な姿勢を崩せと言っているのではない。その姿勢を維持しつつも、プラス・アルファとして著者自身の姿を見せてほしいのだ。この点で、著者は自身の見解と評価をもっと表明してもよかったのではないかという思いが残る。

第二に、前述のように本書は内容を余りにも盛り込み過ぎたためか、倫理理論の解説や比較の際に、具体例や思考実験の類が少ないため、読者に具体的なイメージを喚起させる力に物足りなさを覚えることである。特に、本書が高校生をも読者に想定している以上、理解を促進するために、内容を削ってでも具体例や思考実験を補うべきではなかったであろうか。これに関連してさらに付言すれば、本書には哲学特有の「毒」が薄い。著者自身も言うように、倫理学は道徳哲学と同義である以上（八頁）、本書には哲学の入門書としての役割も期待していいはずだ。そして、ここで想起すべきなのがソクラテスである。「哲学者はアブである」と喝破したのは彼であった。しかし、残念ながら本書には読者を覚醒させるべく、一刺しするような要素が見当たらないのだ。だが、常識や思い込みを揺さぶることは、危険ではあるが（時には命も失う！）、哲学の使命の一つではなかったか。著者自身も、倫理学を学び、倫理的に考える

ことは自分を批判したり、否定したりすることになると述べている（一九四頁）。そうであるならば、なおさら、鬼面人を驚かすとは言わないまでも、ここはサンデルよろしく、道徳的ジレンマの例の一つでも出し、読者を脅かし、不安に陥れることで哲学の世界に誘うこともできたかも知れない。

とはいえ、最後に述べてきたことは、本書を教科書として使用する教師が補えば事足りるはずであり、その価値をいささかも減じるものではない。本書は、学生はもちろん、哲学・倫理学を専門としない、そして興味も関心も無い学生の教育に日々苦闘する教師にも推奨できる。一読すれば授業のヒントをきくと見出せることだろう。本書は初学者を念頭に置いた弘文堂の「ブレップシリーズ」の一冊として上梓された。同シリーズには版を重ねているものも数多い。本書も版を重ね、末長く読者に愛されることを願っている。

#### 注

- (1) 二〇一〇年度第六三回関西倫理学会大会ワークショップ「非専門場面での哲学・倫理学教育」、二〇一一年度第七〇回日本哲学会大会哲学教育ワークショップ「高校生」にどんな哲学的かわりができるか——現代社会における高等学校「哲学・倫理」教育」、二〇一一年度第六二回日本倫理学会大会ワークショップ「初等・中等教育に対する倫理学の貢献可能性」。

(2) この点に関しては、著者が読書案内に挙げていない以下の二冊を推奨したい。必ずしも倫理学の入門書とは言えないかも知れないが、記述が平明であるのみならず、倫理学史や倫理学理論の概説よりも、著者自身の見解や評価をはっきり打ち出すことに重きが置かれているので面白く読める。アンソニー・ウェストン『ここからはじまる倫理』野矢茂樹・高村夏輝・法野谷俊哉訳、春秋社、二〇〇四年、デイヴィッド・ミラー『政治哲学』山岡龍一・森達也訳、岩波書店、二〇〇五年。

(こじょう たくみち・京都大学)